

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語教育に於けるあいづちに関する考察
Author(s)	鄒, 敏
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 16期 : 94 - 99
Issue Date	2002-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038894
Right	
Relation	



日本語教育に於けるあいづちに関する考察

鄒 敏

【キーワード】 あいづち、あいづちの機能、表現形式、誤用、母語干渉、日本語教育

1. はじめに

現在の日本語教育では、学習者の多様化によって、実際のコミュニケーション能力を伸ばすことを目標とする傾向が主流となってきた。コミュニケーション能力を養成するためのコミュニケーション・アプローチ教授法もますます重要視されてきている。

本稿では日本語を第二言語として学習する人を対象に、インターネットで公開された北九州市立大学国際環境工学部情報メディア工学科で収録された日本語会話のデータベース（日本語母語話者と非母語話者の発話パターン）資料を参考にして、日本語学習者の言語的なあいづちの使用実態を調査して、日本語教育におけるあいづちに関する考察を行った。

考察の結果として、あいづちは外国人学習者にあまり使用されておらず、使用されたあいづちも量は少なく、表現形式に適切性が欠け、特定の誤用が見られ、母語干渉による誤用も多く出てくるのが分かった。加えて、日本語母語話者の使用する特定のあいづちを学習者が使用しないという「非用」（水谷1985）の問題も含まれている。

あいづちの使用は日本社会の日常のコミュニケーションにおいて、極めて重要な意味を持つ。あいづちの使用がコミュニケーションの円滑な進行に果たす役割は大きい。従って、あいづちを積極的に日本語教育に取り入れることも急務となってきた。

上記の考察結果より今後の日本語教育において、あいづちの導入は一つの重要な学習項目で、それに関する適切な指導も行うべきだと考えている。

2. あいづちの使用状況に関する調査

本考察においては、以下のようにあいづちを定義づけ、狭義のあいづちにとどまらず、広い意味で話し手の話しの進行を助けるために、話の途中で聞き手が入れるものである。

聞き手が話し手の発話の進行を促したり助けたり補ったりするために、自由意志に基づいて（小宮1986）送る短い表現である。形態的には、ハイ、エエ、ウン、ヘエー、ソウデスカ、ナルホドなどのあいづち詞（堀口1988）を中心にした発話、先行する会話の全部あるいは一部の繰り返し、言い換え、話し手の話しの先取り（堀口1988）として現れるものである。

A あいづちの機能と表現形式

日本人同士の会話においては、話を円滑に進めさせるためにあいづちの使用は必要不可欠なものである。あいづちを打つことによって、話し手は聞き手の反応を伺うことができ、その反応で、話を展開し、発展させていく。その意味からいうと、日本語の会話において、「はい」、「なるほど」等のあいづちが伝達できる意味はそれらの語彙自体の意味を遥かに超えると考えられる。あいづちの使用によって、会話は滑らかで、自然に進められる。そこから、他の情報も順調に伝達できる。あいづちは会話に重要な役割を果たすと言える。

自然な日本語の会話において、あいづちは次の働きを果たす。

(1) 聞いているという信号

聞き手は「はい」とか「ええ」とかのあいづちで、「あなたの話を聞いているよ」ということを伝えて、話し手に安心感を与え、会話を展開させる。

(2) 理解しているという信号

話し手はあいづちによって、聞き手がそこまでの話を理解しているか否か、を判断でき、もう一度今の話に戻るか、次へ行くかを定めることができる。

(3) 同意の信号

聞き手は話し手のことを聞いて理解した上で、さらにそれに同意であるという信号を送ることがある。同意を表す「そうそう」、「うん」、「その通りである。」などがよく使われる。

(4) 否定の信号

聞き手は話し手の言うことを聞いて、理解したが、賛成できるか否か、あるいは納得できないかという信号を送ることがある。

(5) 感情の表出

聞き手のあいづちで、話し手は相手が自分の言うことを聞いて感じた驚き、喜び、悲しみ、怒り、疑い、同情、労り、謙遜などいろいろな感情を見ることができ、話題及び話し方の調整ができる。

聞き手は話し手にいろいろな信号を送りながら話を聞き、一方、話し手がこの聞き手から、送られる信号によって、話の進行を助けられたり、時には流れを遮られたりしながら

話しを進めていく。その信号の表現形式について、下記のように整理しておく。

1. あいづち詞

一般にあいづち詞と言われているのは「ハイ」、「エー」、「ソー」、「ん」、「ほんと」、「なるほど」などの応答詞と感動詞である。

2. 繰り返し

聞き手は先行する発話の一部または全部を繰り返す。相手の発話を繰り返すということは、相手の話を聞いているということの現れであるから、これも機能的にはあいづちと考えられる。

3. 言い換え

言い換えるということは話し手の発話の内容を聞き手が自分のことばで再現することで、聞き手が用いる語句は話し手の発話に用いられたものと異なるが相手の発話を聞いている、あるいは理解しているということの現れであるため、これも機能的にはあいづちと考えられる。

4. 先取り

話し手が言い終わらないうちに聞き手が先を予測し、その予測に基づき、打つ先取りのあいづちも表現形式の一つとして、取られる。

B 外国人学習者のあいづちの使用状況に関する分析

外国人との会話において、文法的、内容的には問題ないにも関わらず、やりとりに違和感を感じるというふうに言った日本人がいる。会話を進めていっても、相手があまり反応してくれないため、自分の話を聞いているのか、どれくらい分かったのか、興味を持っているのか、ということが分からないので、話がなかなかスムーズに進められないからである。

日本語非母語話者の場合、あいづちの使用状況はどうであろうか？筑波大学の応用言語学の調査では、初級の日本語学習者はあいづちを使わない、使っても種類、頻度も多くない。上級の日本語学習者の場合は、ある程度あいづちを使っているが、その頻度は日本人の5分の1に過ぎないし、使われるあいづちの種類も少ない。母語話者と会話する場合、上級日本語学習者の方が黙って、じっと聞いている時間が同じ状況で聞き側に立った日本人より長いということが分かった。

本考察において、筆者は北九州市立大学国際環境工学部情報メディア工学科で収録され

た日本語会話のデータベース（日本語母語話者と非母語話者の発話パターン）資料を分析した結果、中に学習者にもっともよく使われたあいづちの表現形式はあいづち詞、繰り返しと言ひ換えであることが分かった。先取りの使用はあまり見られない。あいづち詞、言ひ換えの使用にも誤用が多く見られる。

あいづち詞の誤用の主なものは「そ」型あいづち詞の誤用である。話し手と聞き手によって知識が共有されておらず、本来なら「ソウデスカ」、「ソウデショウネ」などのあいづちを打つべき所で、「ソウデスネ」というあいづちを使う。

言ひ換えの誤用としては、話し手の発話を適当な形に変えずにそのまま繰り返してしまったための誤用があった。主として使うべき動詞の選択や時制を誤ったための誤用が多く見られる。

繰り返しには繰り返すべき語に含まれる形態素を誤ったための誤用と繰り返し方が不完全であったための誤用、及び話し手の話を適当な形に変えず、そのまま繰り返してしまったための誤用が多い。

先取りの表現形式は収録された会話資料の中にはあまり見られない。水谷（1988）は学習者が目標言語における特定の形を「使えない」ないし「使わない」という現象を「非用」と呼び、「非用」は学習者にとってその形（学習項目）の学習が困難であることの現れであるという見解を示している。日本語会話のデータベース資料に対する分析より日本人話者が使う特定のあいづちを学習者が使わないという事実は水谷（1985）の言う「非用」として捉える。

母語干渉によるあいづちの誤用も多く見られた。特に音声面と語彙面において、母語干渉による誤用が多いと考えられる。音声面では、母音の発音が曖昧であったり、アクセント・イントネーションが外国語的であったりといった現象が見られた。母語のあいづちを転用（例：Oh）したり、待遇レベルの低い「う」型のあいづち詞（うん、うんうん等）を多用したりする誤用が見られた。

会話データベース資料に共通して見られた問題点は以下の通りである。

まず、学習者のあいづちの使用頻度が日本語母語話者に比べて低いことがあげられる。母語話者群のあいづち使用頻度は一分間に平均して15～20回である（水谷1988）。しかし、学習者群の場合は平均で3.9回である。しかも、学習者の中には、全体的なあいづち使用頻度は平均的であっても、時としてかなり長い時間あいづちを打たず、ずっと黙り続ける人もいる。

次はあいづちの適切性に関する問題である。特に注意すべきは「ハイ」、「エエ」、「ウン」などの「促進型」のあいづちと「ソウデスカ」、「ナルホド」などの「完結型」のあいづちの区別が付いていないために、完結型を打つべき所で促進型を打ったり、逆に促進型を打つべき所で完結型を打ったりすることがあるという問題点である。また、話し手の発話が完結し、完結型のあいづちを打つことが期待されている所であいづちを打たずに沈

黙する例も多く見られた。

3. あいづちの使用状況に関する考察

日本人が上級学習者の日本語を堪能であると判断する基準の1つにあいづちの頻繁な使用ということがあるという報告がある（筑波大学応用言語学大河原真美さんの報告による）。日本人話者と外国人話者が話す時、日本人側は相手からのあいづちを常に期待して、そのあいづちで話し方や話の方向を決めて、話を進める。外国人話者は日本人話者の暗示に答えられなくて、聞いてばかりいる、あるいは、反応しても、その反応が画一的で、会話をきごちなく感じさせる。外国人学習者は日本人話者からのあいづちをあまり気に止めていないので、話し手と聞き手の会話に調和が欠ける。あいづちを打って、聞き手は反応を示す。その反応によって、話しやすくも話しにくくもなり、また話の展開まで聞き手の反応に影響を受けることもある。そんなやりとりで話を進めるのに慣れた日本人には外国人が何らかのルール違反を犯していると感じられている。

それを生み出した原因はいったい何であろうか。あいづちの使用について、異なる文化背景を持つのが一つの原因である。個人と集団との一致を保つことが古くから美德とされている日本人同士では話をする場合、相手に応答してもらえないと、何となく不安を感じる。その代わりに、相手に絶えず応答し続ける。それは幼いころから自然に身に付いたものである。

しかしながら、西洋文化圏の日本語学習者があいづちを打つ回数という点、メイナード（1987）の調査によれば、アメリカ英語の言語的あいづちの頻度は日本語のそれの3分の1程度であった。話し手の話に割り込み、頻繁にあいづちを打つのはマナー違反とされているので、先取りのあいづちが敬遠される理由は分かる。中国などのアジア文化圏においても、あいづちを打つ頻度は日本ほど多くないと先行調査（水野1988）から伺える。

文化習慣が違う他に、海外の日本語教育にもかなり大きな関係があると思う。日本語の教科書の中にはあいづち表現を豊富に取り入れた教科書も少なくない。しかし、教育の現場では、あいづちは飾りもののように扱われて、つまり、語彙、文型、文法を中心とする教え方が多い。「はい」、「いいえ」「そうです」をちゃんと使えばそれで十分だというふうな教え方である。聞き手のことをあまり考えず、「話す」ことの指導が極めて重用視されている。

そのような教育を受けた学習者は日本語母語話者のあいづちを気に止めず、無視しがちになる。相手からのあいづちを無視して母語話者の反応を正確に読みとれず、母国話者に会話を不自然に感じさせる。その一方、日本語話者を中心とする会話の中で外国人からの反応が少ない、話がどう展開するか、と判断に迷って、コミュニケーションに支障をもたらすということが分かる。

4. おわりに

本稿では、日本語学習者のあいづち使用の状況について、日本語会話のデータベース（日本語母語話者と非母語話者の発話パターン）資料を参考にし、学習者のあいづち使用の実態を調査し、問題を生じた原因を分析してみた。

外国人学習者が日本語を習得して、日本人を相手に日本語でコミュニケーションを行おうとする時、あいづちを打つことができないことは大きな支障になる。学習者があいづちを習得する方法は教室での教師のあいづちによるわずかなインプットと、教室外の自然環境におけるインプットのみであると推測できる。しかしながら、自然環境において接するインプットのすべてに学習者が注意を払い、取り入れるわけではない。特にあいづちのように会話を円滑に進めるために必要でありながら、会話の実質的な内容に関わらない言語行動に十分な注意を払うことは不可能であろう。学習者の日本語のコミュニケーション能力を高めさせるため、あいづちを重要な学習項目の一つとして、日本語教育に取り上げ、それに関する適切な指導も系統的に行うべきであると考えている。

言語教育においては、コミュニケーションをスムーズに展開するために、情報の伝達をできるだけ正確に行うことが求められる。しかし、残念なことに、あいづちに含まれる大量の情報及び働きは重視されていない。日本語を第二言語として行われる日本語教育にあいづちを取り入れることもさることながら、あいづちの使用による会話効果も重視すべきであると思う。

参考文献

- 堀口純子（1997）「日本語教育と会話分析」 くろしお出版
- 小宮千鶴子（1986）「相づち使用の実態－出現傾向とその周辺－」『語学教育研究論叢』第3号 大東文化大学語学教育研究所
- 渡辺恵美子（1993）「日本語学習者のあいづちの分析」『日本語教育』 82号
- 水野義道（1988）「中国語のあいづち」『日本語学』第7巻第13号
- メイナード・K・泉子（1987）「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』第16巻第2号